313 故菊池武夫博士追悼会（中央大学追悼演説会・仙台支部学員会追悼法会・広島支部学員会追悼法会）

〔『法学新報』第22巻8（256）号　大正元年9月1日〕

○故菊池博士追悼会

○中央大学追悼演説会　葬儀当日午後六時より中央大学学生諸氏は主催と為りて大講堂に於て故学長の追悼演説会を開催したり青木雷三郎、山口源二郎、小川吉久、河野寅雄、金田常三郎、岩瀬修治、福田市太郎、柴田正、青木真、米津藤一、村川繁太郎、曾我善蔵、馬場信一、西島敬三、山崎健二郎、徳永善太郎の諸氏委員として七日夜より熱心之か準備に取りかかり万事遺憾なく行届き定刻に至るや来賓並に聴衆陸続として到り青木雷三郎氏先つ簡単に開会の辞を述へ次に山口源二郎氏登壇故人の学徳を述へて降るや花井卓蔵氏は代て登壇大要次の如く演述せられ

今夕は我中央大学長故菊池先生に対する追悼の意を表せんか為に吾吾門人は茲に此会を開くに至つた次第であります、私は今より二十八年前に本校の学生であり先生を師とし慈父として事ふること実に二十八年の久しきに亘り本校に於ては最も古き且厚き関係を有する者の一人であります、従て先生に付ては語らんと欲する頗る多きを有し又最も多くを承知して

居るのであります、申す迄もなく学問人格に於て世間稀に見るの先生なれは私共の如き者が此所に於て語るの必要もないのでありますが私は簡単に先生の一生を御話したいのであります

先生は終始学問を以て国家に尽された人であります、学問を経綸の上に行ひ学問を実業の上に行ひし人は少なしとしない、而して成功者も随分多くあります、之を経綸の上に行へは好名が得られ之を実業の上に行へは富貴が得られる、而も此名と利とを捨てて終始学問を以て国家に尽されし人は我菊池先生あるのみであります

先生は陸中盛岡の人で旧南部藩士であります、笈を負ふて東京に来り大学南校に法律を学び弱冠にして擢でられて米国に遊ひ業をボストン大学に修め本邦最先の留学生であります、留まること五年、帰朝後直ちに職を司法省に奉し法律学を実地に応用し兼て大学に聘せられて法律の教育を掌られました、即ち入ては大学に教へ出ては司法行政の事務に当られたる点に於て亦本邦最先の人たるを失はないのであります、先生の官吏としての生活は大学を辞せられてより専ら司法省に留まり一面司法行政の事に与り一面法典編纂の業に当られ而して民事局長を以て冠を掛け野に下られたのであります、先生が立法の上に尽されしは民法編纂を始として商法、刑法、刑事訴訟法、監獄法、刑法施行法等の編纂に与られ法典調査委員、法律取調委員の職に在ること前後二十五年間頗る功労の大なるものがあつたのであります

夫れ学問を行政の上に行ふ世間其人に乏しとしない、学問を立法の上に行ふ亦其人少なしとせずであります、然れども行政の上に立法の上に将教育の上に終始一貫学問を以て国家に貢献されし人は先生を措て之を他に求むるを得ないのであります、豈に啻に之のみならんや、明治二十四年先生民間に下り弁護士となるや、為めに弁護士の品行を向上せしめ民間の法律界先生を得て世間の誤解を防ぎしが如きは更に先生の功の没却すべからざるを認めなければならぬ、先生の功績は教育の一点のみにても優に地歩を占むるに足るのであります、然るに先生は更に立法に更に行政に功績の顕著なるものがあったのであります、故に先生を失ふは啻に門下生としてのみならず国家の大なる損失であります、豈に独り私の関係に於てのみ之を悲まんや、国家は斯の如き人の得難きを思ひ其功績の多大なるに考へ先生の名と事とは永く後代に伝へなければならぬのであります

先生の学問以外に敬服に堪えざるは人格であります、挙世滔滔として名を求め利を射らんとするの時に当り先生の如き人格と気品とを有する人は実に皆無と云ふも差支ない、生存中の人で人格の人とは誰なりやと問はば能く即答し得る人は如何程ありますか、学問の深き人はあります経綸に長じたる人はあります、然れども人格の高き人と言はば我菊池先生あるのみであつたのであります、故に私は学者としての先生の死を悲しむと共に人格の人として先生を惜むの情に堪ないのであります

吾吾は親しく先生の教を受け未だ一日の恩を報ゆることも叶はずして突如として百年の悔を齎らさるるに至つたのであります、然れども如何に泣き叫ぶも最早先生は帰らないのである、吾吾は冀くは先生の霊魂の加護に依り修養自戒の徳を積み及ばざるは勿論なれど先生の主義を継ぎ力足らず心及ばずと雖も鞠躬努力して先生の厚恩に報ずることを勉むるの外ないのであります

追悼の辞として一言を述へ諸君の御来聴の厚意を謝します

高崎介藏氏は左の如く

アラビヤ人が二日二夜砂漠を旅行して非常に饑を覚えた時に潅木茂り清水滾滾として湧く「オイシス」を見出しました、而して其所に波斯人の忘れ物の皮袋がありました、アラビヤ人思へらく此中には胡桃か棗の食物が入つて居るに違ひないと、大に喜び之を開いて見ました、所が何そ計らん、中には胡桃もなく棗もなく無数の真珠がありました、此時のアラビヤ人の驚きと失望は非常なもので饑えたる時に無数の真珠も吾に於て何かあらんと嘆息したと云ふ話があります、諸君の今の時代に於て先生の如き人格と品性を想ふは丁度アラビヤ人の食物に於けるが如しであります、而も死の神は終に先生を奪去つてしまいました、私は実に悲痛の極言ふべき所を知らないのであります

私の始めて先生を知りしは明治二十年でありまして本校が英吉利法律学校と云つた時代に原書科に在つて先生の講義を聴いたのであります、先生の講義振は平平坦坦たるもので而も趣味津津として尽きざるものがありました

先生は鳩山博士等と共に吾国の初期の留学生でありますが先生には鳩山博士に能く似た所があるやうに思はれます、即ち何事にも淡泊で極めて平民的で而して意思が非常に堅固であつた点等は殊にそうであります

米国のテキサスで計算した所に依りますれば一粒の米は三年の後に四万四斗となり之が三十年の後には実に二百五十六億といふ驚くべき大数になるさうありでます、思ふに先生の感化の及ぶ所は広く且永く恰も一粒の米が忽ちにして巨額の米を生ずるが如く我菊池先生亡きの後に於て多くの人格高き人を出すに至ることと信じます

花岡敏夫氏は左の如く

私は、明治三十五年以来菊池博士の事務所に在りて博士の下に働いて居りましたので未だ世間に知れて居ない内情を熟く存じて居ります、唯余りに長く余りに接近し過ぎた為め却て博士の特長が何所に在るか一寸見当が附きかねますが茲に私が内面より見たる菊池博士を有りの儘に御話する考であります

曾て私は博士と一緒に旅行したことがあります、而も草鞋バキで汽車は三等といふ旅行でありました、博士の足はノロイ方でありました、そこで私は先へ歩き越して置いて、先で一休して博士の来るのを待つて居る、博士が来る、又歩き始める、直ぐ又歩き越す、先で一休して待受けるといふ風でありました、併しながら足はノロカツタが始から終まで常に同一

の歩調を保つて居りました、博士は毎朝一日の里程を計算して、之を時間に割当てて歩くといふ風で殆ど器械の様に規則的に歩まれました、是れが博士の旅行法でありました、博士の一生は、万事が丁度此旅行の様に器械的で秩序的であつたのであります、是れは一面から見れば如何にも間だるく余りに冷静に見えますが然し之が博士の特長であつたのであります、博士が万事に規則的であつたことに付て今一例を申せば博士は事務所で種種なる用事を吾吾に命ずるに必ず英語を使用されたことであります、英語の如きものは不断に使用して居なければ一旦必要を感ずる場合に、容易に事を弁ずることが出来ないからであります

博士は極めて口数が少なく滅多に無駄な言葉を使はなかつた、而も其言は非常に鋭かつたのであります、曾て大学卒業の弁護士に、帝室財産に関係した事件の取調を命じたことがありまして其時其弁護士は御料局長に代理資格の有ることを知らないで宮内大臣を代表者の様に認めました、そこで、博士は怫然として怒り「君は法律を学んだか」唯此鋭き一言を発したのみでありました博士は万事に冷静で規則的でありますから事務所では非常に厳格でありました、然し私邸に在ては之に反して随分温情の掬すべきものがあつたのであります、私などが博士の私邸に遊びに行くと朝から晩まで引止めて友達扱にされ、又一緒に食事をすることを無上の楽とせられた位であります、即ち博士は外面は如何にも冷静で、否寧ろ冷淡の様に見えますが内心は頗る温情に富んで居られたのであります、亡くなられた五日前にも博士を訪へば博士は此頃は一向に食欲が進まないで困ると嘆息され而して今日は残念だけれども一緒に食事することが出来ないから下の部屋で食つて呉れ私は二階で粥を食ふからと言はれました、博士の其言葉は今猶ほ耳にアリアリと残つて居ますが是れ実に博士の温き真情の吐露されたものであります

又こんな事がありました、博士の創業時代から事務所に居た弁護士で選挙運動を始めました所が選挙間際で運動費の欠乏を告げた時に電報を以て博士の許に金を借りることを依頼しました、其時博士は快く早早之を送られました、其弁護士は不幸にして落選しましたが博士は唯軽率に候補者に立つたことを惜んだのみで何事をも言はれなかつたさうであります、由来博士は物質的に人に補助を与へることは却て本人の意思を弱からしむるものであると言はれて好まれなかつたので精神的に人を救ふことを努められたのであります、非常に厳格で而も外面は如何にも冷淡の様に見ゆる博士は人の急に際しては斯の如く援助を与ふるの人であつたのであります

一昨年私が始めて一家を構へて友人及ひ博士を招待しました、固より博士は快諾されまして、私は其日に博士の来られることを楽んで居ました、所が相憎宴会に御出がなかった、博士は其日に事務所に居られて来て下さる筈であつたのを劇に不具合になられて終に我慢し切れず内に帰られたのださうであります、今より考へると是れが博士の発病の初期であつたのであります

博士の後進を引立てることに非常に熱心でありましたことは申すまでもありませんが私の如き者が弁護士の仕事に趣味を持つに至つたのも一に博士の賜でありまして今更に感謝の念に堪えないのであります、私が親しく博士から受けた教訓は随分多くありまして一一御話する訳にもまゐりませんが今其の一を申せば博士の本宅落成の時でありました、其時私に「自分は漸く此年になつて始めて自分の作つた家に入ることか出来た」と申されました、是れはあせらずに実力を養成せよ一時的の功名を希ふてはならぬといふ教訓であつたと後で解りました

之を要するに博士は平素些細な事にも能く注意され片時も其注意を怠らなかった人で博士五十九年の生涯は恰も亀の歩の如く著実に冷静に規則的に秩序的に一の奇抜な事もなく言はは平平凡凡で且ジミなものでありましたが是れ取りも直さず博士の特長とする所で博士の偉大なりし所以でありますまいか

大場茂馬氏は左の如く

菊池先生の特色は人格に在りました、私は頗る多くの名士に接しましたが未だ曾て先生の様に非難のない人はありませんでした

若し先生に対して非難ありとするならば唯一つあります、それは「公平過ぎる」といふ非難であります、夫の法律取調委員会で先生が常に正義論を唱へられたことは諸君の熟知せらるる所と信じます

今私の知れる二三の例を挙げて見ますれば曾て刑事訴訟法中の忌避の規定を廃すべきや否やの問題が起りました、其際に於ける菊池先生の態度でありますが先生は既に回避、除斥の規定の存する以上は忌避の規定は断然之を廃すべしと主張されました、諸君先生の職は弁護士であります、而して忌避の規定は弁護士の武器とも云ふべきものであります、然るに先生は此武器の存在を宜しからずとして熱心に反対を叫ばれたのであります、是即先生に対して余りに公平過ぎるとの非難があつた所以であります、又旧民法編纂の調査時代でありました、先生は時の法相山田伯の秘書官でありましたが仏法に則ることを頻りに反対され法典制定の後も尚ほ反対説を言明されましたことであります、先生は秘書官たるの故を以て自信を枉るが如き人でなく断乎として自説を主張されたのであります、是れ亦先生が学者として其学に忠なる所以でありまして軈て世人からは余りに公平過ぎるとの非難を被むる所以であります、二三年前のことでありますが諸君も知らるる判検事の試験の科目の一に外国語を附加すへきや否やに付き議論が生じました、其時先生は時勢の上から外国語を科するの必要なるを説かれ終には貴族院に於て盛に賛成演説までされました、諸君先生は当大学の学長であります、而して案は当大学の利益より考ふれは不利益の鉄案であつたのであります、然るに先生は正義の為めには自他の利を顧みず其所信を陳ぶるに毫も躊躇する所がなかつたのであります、即ち吾吾より考ふれば先生の議論は常に余りに公平過ぎたる議論であ

つたのであります
斯く先生は余りに公平過ぎた人であります、併しながら是れ非難に似て非難ではありません、世間には博学の人はあります、人格の高いと云ふ人もあります、而も皆何等かの非難があるのであります、然るに先生に在りては一点の非難もなかつたのであります、是れ全く先生が飽迄公平であつた為めであります、凡そ善良なるものは過ぎれば過ぎるほど宜しき訳で先生が公平過ぎたことが即ち先生に対して一点の非難もなく先生の人格が時代に超越せし所以であらうと信じます

諸君　私は先生に学ぶ所固より多いのであります、殊に先生に学ぶ所は公平といふことであります、而も公平過ぎる公平であります

太田資時氏は左の如く

諸君　菊池君の徳は余りに大に品性は余りに高い、到底余の如き者が之を述ぶるはおこがましいから之を述べません、否寧ろ述ぶることを得ないのである

余の菊池君を知りしは弁護士以来の交際上より得たる結果で一言菊池君より与へられたる教訓を諸君に分たんと思ふ、余の述ぶる所は花岡君の頗る精細なりしに似ず、甚だ粗大であることを前以て御断りし、仮に之を題すれば「菊池君にして初めて死の悪むべきを知る」とでも申すべきか

想ひ起せば明治三十年、私が再び弁護士となる時であった、之を先輩菊池君に計りました、其時、君の親しく問はるるは「君の意思は真に弁護士をやる考であるか」との一言であった、私に其意思なくして君に計る必要なし、言や甚だ私を愚弄するものの如しである、併しながら能く之を玩味すれば是れ非常に親切なる語であるのである、即ち君に堅実なる意思を以て之を成遂げんとする覚悟ありやとの質問であつたのである、而して私は唯此一語に依りどうやらかうやら弁護士と為ることを得たのである、普通ならば資本の有無依頼者の多少等を訊くべきを、唯精神のみを問はれた所は是れ正しく菊池君の非凡なりし所以である

諸君　諸君の志す所は種種ありませう、然れども弁護士なれば弁護士、銀行家なれば銀行家又裁判官なれば裁判官、何れにしても必ず之を成遂ぐるの精神を以て、各其職業を選ばなければならず、乃ち余が菊池君より得たる教訓を諸君に御分する次第であります

諸君　凡そ死を悪むは生とし世に存する者の常情である、所が是れは死者其者の主観的の言であつて客観的には必ずしも然らざるものがある、死は生前の悪事悪行を消滅せしめ善事善行をのみ称揚せしむるものである、即ち死は常に生前の悪徳を人の考より取去るものである、故に凡人に在りては必ずしも悪むべきものではないのである、然るに菊池君に於かせられては其死の為めに滅却すへき一の悪事悪行なし、従つて死は君の為めに何等の軽重を加へない、敢て死の為めに君の徳が表はれた訳ではないのである、而も菊池君は更に其徳を積む能はず、吾吾は最早君の温容に接し君の教訓を受くるに由ないのである、嗚呼菊池君にして始めて死の恐るべく、悪

むべきを知るのである

奥田義人氏は左の如く

諸君　私は此数日間悲嘆の余り食は進まず眠は足らず非常に疲労を覚えて居ります、而して只今故菊池先生を染井が岡に送つて帰つた計りで疲労の上に疲労が加はつて居りますから今此追悼会に臨み詳く先生の過去に付き諸君に御話し致すことは到底出来得られぬのを遺憾とするのであります、即ち私は只茲に先生の病歴の概要と所感の一端を述ぶるに止めて御免を蒙ることに致します

諸君　人生悲痛のことの多きが中にも君を失ひ親を失ひ恩師を失ひたるに勝るもの恐らくはありますまい、私と故菊池先生との関係を簡単に申して見ますれば今より三十有余年前即ち明治十四五年頃には先生は東京大学法学部に講師として英吉利法を教授して居られました、私も明治十五年同大学法学部第二年生であった、当時始めて先生に就て英吉利法中代理法動産委託法流通証書法等の教を受けた一人であつて顧みれば最早三昔のことであります、而して明治十八年即ち私が大学法学部を卒業した翌年故先生方が主となりて此中央大学の前身たる英吉利法律学校を創立せらるるに当つて私も亦先生の御勧めに依り創立者の末席を汚かすの栄を得爾来今日に至るまで二十七八年の久しき一日の間断なく先生の懇篤なる指導を受けて来つたものでありますから私に取りましては先生は恩師中の恩師であつたのであります、此恩師中の恩師たりし先生が今や忽焉として逝かれました、私の驚愕と痛悼とは如何計りであるか宜しく諸君の御察しを請うのであります

先生は諸君の多くは御承知でもありましようが蒲柳の質であつて決して大丈夫と申す体質の方ではなかったのでありますが平素深く摂生に注意して居られたものでありますから此二十七八年間先生が病の為に永く臥床せられたと云ふ様なことは全く承知せぬ位であります、然るに一昨年夏弁護事務の為め再度台湾に渡られたことがありましたが二度目の渡台後甚だしく健康を害されて時時本大学に来られても其以前と異なりて兎角疲労を覚えて居らるる様子が明に見えましたので私共も頻に静養を勧めて居りました、而して其当時先生自身は私共が外部より見受けたより健康の勝れざることを一層強く自覚して居られたことが先生の逝かれた当日未亡人より私に渡されました書翰に依つて初めて知られました、即ち其書翰は認められた儘で先生の手箱の中に遺つて居つたもので之を披て見ました所が認められた年月日が恰も其当時に該当して居ります、而して之を一読しましたのに自分は此頃甚だしく健康を損じたことを自覚する、此儘で種種の業務に従事して居ては遂には取り返へしも付かぬこととなるも計られぬから何事も擲て専心静養を致したい、就ては中央大学の方も平素何等の用事を勤むると云ふのでなくとも其職に在つて見れば矢張り気掛りであるから此際学長の職を辞することに致したい、其内又健全の身体となつたなら力のあらむ限りは尽くすことにするから宜敷取計ふて呉れいと云ふ主意が認めてありました、之に拠て見ますれば其当時先生が如何に健康の勝れ

ないことを自覚して居られたかを推察することが出来るのであります、而も此書翰を認めて置きながら其儘に打ちやつて置かれたと云ふのは其後になつて先生の意外に健康が稍々回復せらるることを得たからであると考へらるるのであります、即ち現に一昨年の冬は熱海に静養せられてあつて私も毎年末には同地に参るのが殆ど慣習となつて居るものであるから同地で先生に面会し屢々往復も致し又界隈の散歩も共に致した様な次第であつたのでありまするし続て昨年の五月には伊勢の山田に於て本大学の学員会があつて私は先生に随ひて之に臨み大廟にも参拝し又同地の中学校に於て催された講演会にも臨むで共に演説も致した位で頗る元気になつて居られたのであります

然るに昨年の七月頃になりまして再ひ健康を害せらるるに至りて遂に臥床せられ而も不幸にも病勢漸次募り来る様子に見えましたので昨冬の如きは頗る心配して居つたのでありますが本年の春になりましてからは幸にも病勢怠り来り現に先達で久久で見舞ました時などは洋服を著用して庭園の内外も歩行せられ来客にも平素の如くに応接せらるる等頓と健康の平素と異なることのない位に見受けた程快復して居られたものでありますから此分なれば遠からず全快せらるるに至ることと全く安心して居つたのであります、所で去る六日本大学に於て第二十七回卒業証書授与式を挙行しましたので私は学長に代はりて卒業証書及ひ賞与等を授与し卒業生諸子に告別の辞を述へ式終て一同撮影を致し是れより宴会に移らむとする際突然電話を以て先生が危篤なと云ふ通知がありましたので事の意外に驚きながら不取敢急ぎ大久保なる先生の邸に参りました、然るに先生は数刻前溘焉として逝かれたと承り失望落胆しながら先生の遺体を拝し語らむと欲して語ること能はす只只無限の感に打たれたのであります、未亡人より承れば前日来忽然病勢革まり遂に茲に至つたとのことでありました、即ち本日は本郷駒込吉祥寺に於て校葬を行ひ続て染井が岡に先生の遺体を送つたので実に夢の如き思を致します

右述へました通りの次第で私は恩師中の恩師を失つたことでありますから個人の関係として深く悲嘆を覚ゆるのは勿論のことでありますが個人の関係を離れて見ましても先生を失つたことは世の中に多大の損失を与へたことを疑ひませぬのであつて別して悲嘆するのであります、何ぜと申さば先生は学者として又実際家としては常に穏健の説を唱へて世の中が理屈一点張りに傾ける趨勢に対抗せられ個人としては一身一家を処するに終始質素簡易の主義を守りて世の中が贅沢と虚飾に奔せつつある傾向に対持せられ人格一世に高く超然として自ら世範と為つて居つた人であるからであります、学者として又実際家として先生の唱へられた所は世の中に多く知られて居ることでありますから私は更めて茲に喋喋述べるの必要を認めませぬが先生が一身一家を処するに質素簡易の主義を守つて居られたことに付ては或は多く知られて居らぬかも知れませぬ、私共が三十年前に大学に於て教を受けた当時先生の風采を思ひ起せば立襟の書生背広服で浅黄色のメレンスの

信玄袋に書冊を入れ之を肩にしよつてテクテク歩きて出入して居られましたが三十年後の今日も其簡単質素なること依然として変ることなく降雨の日などは郵便配達人の著て居る様な合羽を穿ちて不相変歩いて居られました、宅に参つて見ますれは日常必要品の外は殆と一も備へてない、従ひ床を見れば何時も同一様な画幅か掛けてあり食堂を見れば食卓には敷物もなく家族の方と食事を共にせらるる所は恰も学校の寄宿舎同然の状態と云ふ様な訳で万事簡易であつたことは実に想像以外のものでありましたが是れは今日世を憚らずに贅沢を極め虚飾を競ふ世態には此上もなき訓戒と為るものであります、然るに此人格の人此模範の人が今や忽焉として世を去られたのは独り私が悲み且つ惜むのみではない、先生を知ると知らざるとを問はず私と其感を同しくせらるることと信ずるのであります、今夕私は此以上茲に述ぶるの勇気を持ちませぬ、諸君は何卒私の意の在る所を言外に御察あらむことを希望致します

江木衷氏は左の如く

余は昨夜大分より帰つた、大分で博士の訃音に接したのである、今回始めて展望車といふものに乗つたが車上の眺めは唯後方にのみ在つて前方を見ることを得ない、而も其眺めが段段と後の方に遠かつて行くのが丁度菊池博士の様で余は無量の哀感を催した

汽車の中で二冊の小説を読んだが一は仏の文豪メーテルリングの文集でこんな事が書いてある（文集を取出して訳す）

「吾吾の過去は遥なる遠景に於て吾吾の後方に展かれり、而して其過去は恰も煙霧に包まれたる荒れたる都市の如く地平線上に眠れり、五六の小高き山は其境を劃し秀てたる峰は其傍に聳へ其所に主なる出来事は塔の如く立てり、或ものは灯か点され其他のものは段段と忘却の暗の底に沈みつつあり、樹木は物皆暗き影を投け万物は死せるが如く見ゆ、唯記憶あり、而も其記憶も亦段段と薄ぎ行きて終には唯朧げなるもののみ残れり、此寂寥たる所に現在と過去との界線あり」

以下著者の人生観となつて居る余は此一節を読み又丁度菊池博士の事を思ひ一種言ふべからざる悲哀に打たれたのである茲に一つ博士の為めに惜しいことがある、博士は米国で学問をした人であるが欧米の学問は皆一貫せる人生観から出て居る、政治学も法律学も経済学も文学も美術も皆其根源を人生観に発して居る、然らば菊池博士は如何なる人生観に依り教育されたかと言ふに当時の人生観は人生に価値あり目的ありといふ唯心論であつた、今は之を旧唯心論と称し一箇の空想として居るが然し之がルソーの民約論となりて仏国革命を教（勃）発せしめ「ローマンチック」の文学を生じて一時世界を風靡したのである、所が其後ダル井ンが進化論を出し物質論を唱ふるや人は牛馬と等しく天然自然の機械に過ぎぬ、宇宙に神なし人に霊なしと云ふに至り所謂自然主義の人生観を生じたのである、即ち唯心論倒れて唯物論の時代となつたのである、然るに今より二十年前に発芽し此十五年以来発展し来りたる

ものが新唯心論であつて即ち人には意思の自由あり霊魂もあるといふことを科学的に説明するのである、菊池博士は旧唯心論の教育を受けた人で而も唯物論の時代に遭ひ今や再ひ唯心論の時代に入らんとするの時に当り逝かれたのである、法学に於ても菊池君の生存中は実体法学廃れて形式法学の盛であつた時代で再ひ又実体法学の時代の来らんとするの時博士は逝かれたのである、私が博士の為に惜むのは之である、蓋最新の思潮たる新唯心論を理解するには旧唯心論を吸ふた人でなければならぬ、即ち博士は現代の新思想を鼓吹するには欠くべからざる人であつたのである、先頃有楽座に上場した「マグダ」の如きも大分世間の問題となつたが新思想を理解せざる人に取つては真に隔世の感があつたに違ひない、私が汽車中に携帯せし今一つの小説はアベコベとでも題すべきもので（本を見せる）此表紙にあるが如く親が子に教へられて居るのである、世間には随分此親の如き古い頭が充満して居る、私は此意味に於て菊池博士の長逝を惜む、博士の為めに、将た時代の為めに

ト部喜太郎氏は左の如く

菊池先生には種種なる方面がある、即ち学者としての先生、実務家としての先生又徳行の人としての先生といふ風に見方に依つて種種なる方面がある、併しながら私は今茲に先生が徳行の人としての感想を述べて見たいと思ふ

先生は近年は学校で教壇に立たれることはなかつた、然るに先生の精神上の感化は実に著しきものがあつた、古語に「其身正しければ令せずして行はれ其身正しからざれば令すと雖も行はれず」といふことがある、先生の如き高徳の人は其身教壇に立たずと雖も其感化は自ら学生に及んだのである、所謂令せずして行はれたのである、殊に先生が毎年卒業式の日に諄諄として説かれたる告別の辞は吾吾に取て最も有益なる教訓であつた、先生亡きの後永く之を記憶して違ふことなきを勉めなければならぬ

論語に「汝君子の儒と為れ小人の儒と為るなかれ」といふ言葉があります、当今には曲学阿世の学者といふ者が随分多くありますが先生は君子の儒であつたのである、先生の功業を数へ立つれば際限もないが先生が明治二十四年に官を辞し弁護士となられた為めに当時の弁護士界の気風を向上せしめたるが如きは疑もなく先生の人格の感化に出づるものである、先生は寡言重厚ともいふべき人で巧言令色の如きは先生の蛇蝎視された所である、又今日の通弊は説明余りに詳細にして実行之に伴はざることに在れども先生は自身で言はれたことは必ず之を行ひ言行常に一致されたのである、斯の如くにして先生は道頽れ徳廃れたる末世とも謂つべき（ママ）今の世に毅然として善を善として悪を悪とし実践躬行の徳を積まれたのである、されば先生の実践道徳を行ふは吾吾の権利にして又義務で送葬の如きも先生に対する追善供養の道ではあるが最も大切なるは先生の志を継ぐに在ると信ずる

諸君　吾吾は須らく先生の相続人と為り学問と徳行とを以て世の為めに貢献する所なくてはならぬ

岡田泰蔵氏は左の如く

今迄に諸君の述へられた所を総括すれば要するに先生は学と徳に於て当代稀に見る偉人でありまして其感化と功績は頗る広く且大なるものがあつたのであります、吾吾は今先生の訃に接し誠に悲痛の情に堪へないのであります、併しながら此際只先生の死を悲むのみが吾吾の能事ではない、吾吾は先生の永き離別を悲むと共に須らく先生生前の志を継ぎて大に世の為めに貢献する所なくてはならぬのであります

想ひ起すのは昨年卒業式の時に先生が卒業生に与へられし訓戒の辞であります、当日先生は卒業生に向ひ「諸君は紳士たれ」と言はれました、惟ふに先生の志は自ら世に立ちて紳士となることに在り、而も立派に之を実行せられたのであります、エドワード七世の未だ皇太子であつた時に太子を知れる人の話に、「皇太子は只皇太子として完全ならざることを恐るるよりは紳士たることに於て何人にも恐るることなし」と評しましたが先生も亦た中央大学の学長として好評を博するよりも紳士として何人にも譲らざることを努められたのであります、さればこそ先生は紳士の典型として一代の尊崇する所と成つたのである、此事は最も諸君の鑑とせねばならぬことと信じます、諸君私は繰返して言ふ、我我は先生の長逝を悼むと共に先生の志を継ぐことの我我の責務なることを感ずること切なるものであります

演述せられ尚ほ横田稔、常田力、陳仲揚の諸氏も簡単に故人を追慕するの情を披瀝せられ孰れも熱烈沈痛を極む参集者は奥田義人、伊藤悌治、岡野敬次郎、江木衷、山田喜之助、花井卓蔵、高崎介蔵、花岡敏夫、大場茂馬、太田資時、卜部喜太郎、岡田泰蔵、松林治義、広井辰太郎、高野金重諸氏外学員、学生を始めとして故人の近親故旧の者多数を占め優に二千名に上り会場の内外に溢るるに至れり尚ほ学生村川繁太郎、青木真、米津藤一の諸氏は演説を為す筈なりしも時既に深更に近つきたれは天野徳也氏は閉会の旨を述へ併せて聴衆の多数か最終まて斯く熱心静粛に傍聴せられたる好意を謝し其各自の退散したるは午後十時半蓋近来稀に見る所の盛大なる追悼会なりき因に前記演説は孰れも筆記の大要にして匆卒の際一一各家の訂正を請ふに遑なく掲載したるものなれは或は誤記なきを保し難し読者の諒察を仰く

○仙台支部学員会追悼法会　去る七月二十七日は故博士の三七忌日に相当するを以て仙台在住の学員諸氏は仙台市東二番町曹洞宗同事舎に於て追悼の法会を営めり出席者は伊藤浩蔵、林安宅、千葉彌助、門屋直哉、渡辺喜兵衛、米村精太、根本仙三郎、音羽誠、青山幾之助、桜田寿、佐々木幸助、佐藤権三郎、阿部大助、三島駒治、柴生田鉄猪の諸氏にして厳粛なる式典を挙け孰れも無量の感に打たれつつ散会したり

○広島支部学員会追悼法会　去月九日は故菊池博士の三十五日の忌辰に当れるを以て広島中央大学学員会支部に於ては高田似壠氏発起人と為り午後一時より追悼法会を広島市小町国泰寺に於て執行したり住職西沢仏海師焼香の後霊前に斎揖し大法院殿鉄心機外居士の為めに唱偈し衆僧と共に経を誦す式頗る荘厳を

極め次に支部幹事の読偈あり結ふに馬場控訴院長の悼辞を以てす辞意荘重にして周匝師友の情誼を叙し縷縷数百言惻惻人を動かす了て参集諸家の焚香瞑拝ありて壇を退く来会者は馬場愿治、乾孚志、執行軌正、江藤直作、早速整爾、横山金太郎、岡崎熊三郎、赤堀亀雄、香川秀作、松井繁太郎、高橋栄之助、山田三郎諸氏の外学員にあらさる川淵竜起、井前正、原田一、山香次郎吉、石井清美、水野忠行、藤田若水、田上諸蔵、佐藤五三其他の数氏一碗の苦茗一盞の氷漿居士の疇昔を追憶回想し其冥福を黙修して散会せり因に当日馬場院長、川淵検事長よりは特に霊前に供物を捧けられたり又当日支部か霊前に奉りたる追悼偈は左の如し

嘉永癸丑　生於盛岡　天資隷悟　青衿離郷　執贄南校　才学異常　遠游米国　蛍雪壇場　帰官司法　蹇蹇周詳　擢列博士名圧衆芳　挂冠下野　状師放光　育英黽勉　諄諄枕堂　経営慘澹　孜孜督庠　上院忠懿　柔克制剛　参編典議　匡目提綱時事献策　衷心稽量　奉身倹素　拾己迪当　辰望星拱　偉続洋洋　二堅為累　竟登北邙　嗟六十祀　一夢茫茫　薄饌追悼寸断九腸　招魂不返　英霊尚饗

回首五周如一夢。英魂空去跡茫茫。東天暗澹雲煙鎖。杜宇声声惹恨長